



## カナダ統一に情熱

# トルドー首相の十五年

一九六八年以来、十五年余にわたって政権を担当してきたトルドー首相が、辞意を表明した。胸にバラの花をさし、ときにはオートバイを乗り回したり、飛行場でエリザベス女王を見送ったあととくりと回っておどけて見せたりしたトルドー首相。世界に先駆けて中国と国交を樹立し、最近では東西対話と核戦争回避のために世界中を飛び回っていたトルドー首相。そして国内では、国家統一のために最大の努力を傾け、憲法のカナダ移管を達成したトルドー首相。トルドー施政の十五年を振り返ってみた。

カナダ建国の父ジョン・A・マクドナルドを除いて、おそらくピエール・トルドーほど、カナダとその国民に影響を及ぼした人物はいないだろう。およそ二十年にわたる政治生活において、トルドーは十五年間も首相の座を占め、その個人的かつ強力なリーダーシップによって、国内だけでなく国際的にも大きな存在感を与えてきた。

関心において常に傑出していた」

カナダの統一と世界平和——この二つがトルドー首相の最大の関心事であり、また同首相が最も努力をそそいだ問題であることは、疑いがない。その具体的な表れが、二言語政策であり、憲法の移管および人権憲章の制定であり、また南北間対話の推進や核保有国会議の開催などを含む東西間の緊張緩和への一連の努力であった。

### 大学教授から政治家へ

トルドー氏の政治歴は、一九六五年に始まる。



その年、ケベック州から三人の連邦下院議員が誕生した。三人とも若い頃からの友人同士であった。労働組合活動家のジャン・マルシャン、高名なジャーナリストのジェラール・ペレチエ、それに全国的には無名に近いトルドーである。

トルドーはモントリオール大学の法学部を卒業したあと、諸外国で学び、また広く世界各地を旅した俊英であった。枢密院事務局で経済顧問を、母校モントリオール大学で憲法の教授をつとめたこともあった。五〇年代から六〇年代にかけてのトルドーは、政治哲学や社会正義、国家統一といった問題に、深い関心を寄せていた。それに先

立つ一九四九年には、ケベックで起こった有名な「アスベスト・ストライキ」で、労働者側を応援した。(このストは、弾圧と反発の激しさだけでなく、これまで社会問題に無関心だったケベックの若いインテリを引っぱり出

し、のちの社会改革の誘因となったという点でも、画期的事件だった。)

三人は、その翌年、評論誌『シテ・リブレ』を創刊し、ケベックの強圧的なドゥプレシー政権への批判を展開する。これらの評論活動は、「静かな革命」と呼ばれたケベックのさまざまな社会改革に大きな影響を与えたといわれる。

トルドー首相の辞任に対する一般の反応は、ケベックの有力紙『ル・ドゥボア』

の元編集長で、一九七八年から一九八二年までケベック自由党の党首をつとめたクロード・ライアン氏の次の言葉に要約されている。

「ピエール・トルドー氏は、過去二十一年間、最も卓越した連邦政治家であった。彼は、カナダの統一と世界平和への